

一般型大峰 75 霊地名一覧の諸類型と流布

——登山家と研究者の役割——

小 田 匡 保*

I. はじめに

古来より山岳宗教の舞台となってきた日本の霊山では、複数の霊地が特定の数のもとにグルーピングされ、名数の形をとっていることがある。大峰七十五靡・英彦山四十八宿がその代表例であり、それぞれの霊山に「靡」や「宿」と称する霊地が、75 箇所なり 48 箇所存在すると考えられている。もっとも、正確にはこれらの名数は認識のうえでのものであって、実際には常に 75 箇所なり 48 箇所の霊地が存在するというのではない。したがって、前稿¹⁾ではこれを 75 霊地観・48 霊地観というように名づけ、そのような認識像の成立について、大峰七十五靡を例に考察を試みた。

ところで、名数的霊地観が具体的に目に見える形で表現されたもののひとつが、霊地名のリストである。75 霊地観の成立を論じた前稿では、これを「75 霊地名一覧」と名づけたが、その 75 霊地名一覧には大きく分けて『大峯細見記』型」と「一般型」の二つの類型がある²⁾こと、現在流布しているのは筆者が「一般型」と呼ぶタイプであることも、前稿で指摘しておいた。

しかしながら、「一般型」と一括した 75 霊地名一覧も、一覧史料を詳細に比較検討すると、順序が入れ替わっているなど相互に微妙な違いがあることに気がつく。この点については一部既に触れたこともある³⁾が、本稿では、まずこれらの相違点に着目して一般型大峰 75 霊地名

一覧の諸類型を設定し、類型間の先後関係を検討してみたい。この作業は、筆者が以前行なった秘所一覧・四十二宿一覧の整理⁴⁾の延長上にあるとも言えるものである。

もう一点本稿で注目しようとするのは、各史料の執筆者である。秘所一覧や四十二宿一覧と違って、歴史の新しい 75 霊地名一覧史料は、それを書いた人物がはっきりしているが、さらに興味をひかれるのは、いわゆる修験者以外の人々（登山家・研究者など）が執筆者となっていることである。つまり、登山家や研究者の役割に着目することによって、本来修験者の世界のものであった 75 霊地名一覧が、どのように外の世界に流布していったかが見えてくるのではなかろうか。このような関心のもとに、本稿の後半では、75 霊地名一覧の流布について考察を加えてみたい。このことは、大峰に関する地理的知識が、俗人の間でどのように展開していったかを検討する⁵⁾一環にもなる。

II. 一般型 75 霊地名一覧の下位類型

(1) 下位類型への分類と類型間の相違点

まず最初に、これまで管見に入った一般型 75 霊地名一覧史料を年代順に列挙しておく、第 1 表ようになる。最も古いのは、明治 30 年に写された史料 A であるが、明治期の史料は二つしか見られず、大正期に入ってからこの種の史料が頻出するようになることが分かる。

先にも述べたように、これらの史料の間には

* 駒澤大学地理学教室

第1表 一般型 75 霊地名一覧史料リスト (年代順)¹⁾

記号	執筆者・編者名 ²⁾	史料名 ³⁾	写年・刊年	典拠史料
A	(修) 三室戸寺兆玉	「奥駈入峰記録 (仮題)」	明治30(1897)年写	
B	(修) 北原義定	「金峰山七十五靡列記」	明治33(1900)年～ 大正元(1912)年写	
C	(登) 河東碧梧桐	『日本及日本人』613号	大正 2(1913)年刊	
C'	(登) 同上	『日本の山水』	大正 4(1915)年刊	
C''	(登) 同上	『大和アルプス并に大台ヶ原山』 ⁴⁾	大正10(1921)年刊	
D	(登) 木本光三郎編	『吉野群峯』	大正 6(1917)年刊	
E	(修) 大沢円覚	「大峯七十五靡奥駈修行記」	大正 6(1917)年頃写	
F	(修) 明禅	「大峯逆峯修行四拾二宿七拾五路之記」	大正 8(1919)年写	
G	(修) 宮城信雅	『修験』20号	大正15(1926)年刊	
H	(修) 牛窪弘善	『神変』246号	昭和 4(1929)年刊	
H'	(修) 同上	『修験道綱要』	昭和 8(1933)年執筆	
I	(登) 中川秀次・富川清太郎	『大峰山脈と其溪谷』	昭和 9(1934)年刊	
J	(修) (聖護院)	『修験』107号	昭和16(1941)年刊	
K	(他) 大伴茂	『山伏と尊皇』	昭和16(1941)年刊	G
L	(研) 村上俊雄	『修験道の発達』	昭和18(1943)年刊	
M	(他) 大伴茂	『山伏と皇民鍊成』	昭和18(1943)年刊	
N	(他) 米川千秋編	『大峯山』	昭和19(1944)年刊	
O	(他) 大東延和編	『奥吉野へ』	昭和23(1948)年刊	I
P	(登) 仲西政一郎	「大峯の山と谷」	昭和32(1957)年刊	
Q	(修) 天野観明	『神変』618号	昭和36(1961)年刊	
Q'	(修) 同上	『修験道の真髓』	昭和59(1984)年刊	
R	(研) 村山修一	『山伏の歴史』	昭和45(1970)年刊	G
S	(修) 福井良盈	『大峯山奥駈案内記』	昭和45(1970)年頃刊	I・N
T	(修) 森寛応	『神変』733号	昭和46(1971)年刊	
U	(研) 宮家準	『山伏』	昭和48(1973)年刊	F・S
V	(登) 仲西政一郎	『玉置山・瀬八丁』	昭和49(1974)年刊	
W	(修) (三宝院)	『神変』790号	昭和51(1976)年刊	
X	(研) 宮家準	『修験道』	昭和53(1978)年刊	
Y	(他) 柞木田龍善	『修験の山々』	昭和55(1980)年刊	P
Z	(研) 宮家準編	『修験道辞典』	昭和61(1986)年刊	

- 1) 昭和20(1945)年以降分は省略したものもある。各史料の書誌事項は、論末の「史料出典」を参照されたい。
- 2) () 内は執筆者・編者の分類。修＝修験者、登＝登山家、研＝研究者、他＝その他(行政関係など)。
- 3) 雑誌・単行本所収記事の場合は、雑誌・単行本名を記した。
- 4) 史料 C'' は、C・C' と比べて、霊地名の表記がかなり変わっている。編集者の手が入った可能性も考えられる。

相互に微妙な違いがある。それらの違いの中で最も根本的なものは、霊地名の配列順序の入れ替わりである。具体的には、次の3点を挙げることができる⁴⁾。

- a. 第43と第42(孔雀ヶ岳と仏生ヶ岳)が入れ替わっていること
- b. 第17と第16(四阿宿と檜宿)が入れ替わっていること
- c. 第15と第14(菊ヶ池と拝返し)が入れ替わっていること

これらの相違点を指標とすることにより、一

般型75霊地名一覧をさらに下位の類型に分類することができよう。そこで、第1表に掲げた史料から上記6地点の霊地名を抜き出したものが、第2表である。同じ順序の組合せの史料をまとめていくと、一般型の75霊地名一覧は、①～⑤の五つの類型に細分されることがわかる。圧倒的に史料数の多いのは類型④であり、これが現在の一覧の主流である。第14しか判明しない史料Aは、類型①、④、⑤に近い。

さらに、第2表に付け加えておいたように、類型によって、霊地名の列举方向が違ふことが

第 2 表 一般型 75 霊地名一覧の諸類型¹⁾

霊地番号 史料記号	43	42	17	16	15	14	類型	列举方向
A	?	?	?	?	?	拝返し	?	— ²⁾
B	^(マ) 花雀岳	仏生岳	四阿ケ宿	檜ケ宿	菊ケ池	拝返	①	1 から
C	孔雀岳	仏生岳	四阿ケ宿	檜ケ宿	拝返	菊ケ池	②	1 から
H	孔雀岳	仏生岳	四阿ケ宿	檜ケ宿	拝返	菊ケ池		1 から
T	孔雀岳	^(マ) 仙生岳	四阿ケ宿	檜宿	拝返し	菊池		1 から
D	仏生岳	孔雀ケ岳	四阿宿	檜ケ宿	拝み返し	菊ケ池	③	1 から
I	仏生岳	孔雀ケ岳	四阿宿	檜ケ宿	拝み返し	菊ケ池		1 から
O	仏生岳	孔雀ケ岳	四阿宿	檜ケ宿	拝み返し	菊ケ池		— ³⁾
W	仏生岳	孔雀岳	四阿宿	檜ケ宿	拝み返し	菊ケ池		1 から
E	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿宿	菊ケ池	拝返シ	④	1 から
F	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		— ⁴⁾
G	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
J	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返シ		75 から
K	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
L	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
M	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
N	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
Q	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		75 から
R	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ宿	四阿宿	菊ケ池	拝返し		1 から
S	仏性ケ岳	孔雀岳	槍ケ岳	四阿宿	菊ケ池	拝み返し		75 から
U	仏生ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿屋の宿	菊ケ池	拝み返し		— ²⁾
V	仏性ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿の宿	菊ケ池	拝返し		— ³⁾
X	仏生ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿屋の宿	菊ケ池	拝み返し		1 から
Z	仏生ケ岳	孔雀ケ岳	槍ケ岳	四阿屋の宿	菊ケ池	拝み返し		1 から
P	仏生ガ岳	孔雀ガ岳	四阿宿	檜の宿	菊ガ池	拝返し	⑤	1 から
Y	仏生ケ岳	孔雀ケ岳	四阿の宿	檜ケ宿	菊ケ池	拝み返し		— ³⁾
『大峯細 見記』型	(46) 仏生岳	(41) 孔雀ケ岳	(17) 四阿ケ宿	(16) 檜ケ宿	(15) 東巖窟	(14) 蘭池	—	1 から

- 1) 霊地名の表記については、「嶽」は「岳」に、「佛」は「仏」に統一した。
- 2) 文章中に 75 霊地名が出てきており、一覧表の形ではない。
- 3) 通常第 75 とされる柳の宿を第 1 とし、第 1 から列举している。
- 4) 一応「75 から」だが、紹介者の意向が入っている可能性があり、原本の列举方向は不明。
- 5) 地図上に 75 霊地名が示されており、一覧表の形ではない。

認められる。すなわち、類型①～③、⑤は基本的に第 1 の霊地名から挙げるのに対して、類型④では、第 75 から並べるものが多くなる。

また、これも第 2 表を見て気づくように、同じ霊地名でも、類型によって表記が異なる場合がある。たとえば、第 42(43) の霊地名は、類型①～③、⑤では「仏生(ケ)岳」と書かれるが、類型④は「仏性ケ岳」となっているものが大部分である。第 16(17) は、類型①～③、⑤では「檜ケ宿」がほとんどだが、類型④では「槍ケ

岳」と記すものが半数近くある。

このような、類型によって用字の違いの大きい霊地名をピックアップしたのが、第 3 表である。たとえば第 67 の霊地名は、類型①と②は「山上宿」だが、類型③～⑤は「山上ケ岳」であり、第 52 は①と②では「今宿」だが、③～⑤は「古今宿^{ふるいまじゅく}」である。霊地名の相違で多いケースは、名前に「宿」がつくつかつかないかという点である。上述の第 67 の他、霊地番号 60・54・48・19・16(17) がそうであり、特に第 48 禅師

第3表 一般型75 霊地名一覧各類型の霊地名表記¹⁾

類型 ²⁾ 霊地番号	① (B)	② (C)	③ (D)	④ (G)	④ (S)	④ (U)	④ (V)	⑤ (P)	『大峯細 見記』型
72	子守勝手 両社	子守勝手 (ママ) 西社	子守勝手	水分神社	吉野水分 神社	吉野水分 神社	吉野水分 神社	吉野水分 神社	(72) 勝手神社
69	二蔵宿	二蔵ヶ岳	二像の宿	二蔵宿	二蔵宿	二蔵宿	二蔵の宿	二像の宿	—
67	山上宿	山上宿	山上ヶ岳	山上ヶ岳	山上ヶ岳	山上ヶ岳	山上ヶ岳	山上ガ岳	(66) 山上
60	児泊り宿	児泊り	児子泊宿	稚児泊	児泊	稚児泊	稚児泊	稚児泊	(57) 児泊
54	弥山宿	弥山宿 ³⁾	弥仙山	弥山	弥山	弥山	弥山	弥山	(53) 弥山
53	頂仙岳	頂仙岳 ³⁾	頂仙ヶ岳	朝鮮ヶ岳	頂仙ヶ岳	頂仙ヶ岳	頂仙ヶ岳	朝鮮ガ岳	—
52	今宿	今宿	古今宿	古今宿	古今宿	古今宿	古今宿	古今宿	—
48	禅師宿	禅師宿	禅師森	禅師ノ宿	禅師の森	禅師の森	禅師の森	禅師の森	(51) 禅師宿
47	五古嶺	五古嶺	五古嶺	五鉢嶺	五鉢の嶺	五鉢の峰	五鉢の嶺	五鉢の嶺	(49) 五古嶺
44	楊子宿	楊枝宿	楊枝の宿	楊子の宿	楊子の宿	楊子の宿	楊子の宿	楊枝の宿	(47) 楊枝宿
43	(ママ) 花雀岳	孔雀岳	仏生岳	仏性ヶ岳	仏性ヶ岳	仏生ヶ岳	仏性ヶ岳	仏生ガ岳	(46) 仏生岳
42	仏生岳	仏生岳	孔雀ヶ岳	孔雀ヶ岳	孔雀岳	孔雀ヶ岳	孔雀ヶ岳	孔雀ガ岳	(41) 孔雀ヶ岳
38	深山宿	深山宿	深仙宿	深仙宿	深仙宿	深仙	深仙宿	深仙宿	(36) 深山
21	平地宿	平地宿	平次宿	平地宿	平治宿	平治の宿	平地宿	平治の宿	(21) 平地宿
19	行仙宿	行仙宿	行仙宿	行仙岳	行仙岳	行仙岳	行仙岳	行仙宿	(19) 行仙宿
18	仙ヶ岳	仙ヶ岳	仙ヶ岳	笠捨	笠捨	笠捨	仙ヶ岳	仙ガ岳	(18) 仙ヶ岳
17	四阿ヶ宿	四阿ヶ宿	四阿宿	檜ヶ宿	檜ヶ岳	檜ヶ岳	檜ヶ岳	四阿宿	(17) 四阿ヶ宿
16	檜ヶ宿	檜ヶ宿	檜ヶ宿	四阿宿	四阿宿	四阿屋の宿	四阿の宿	檜の宿	(16) 檜ヶ宿
15	菊ヶ池	拝返	拝み返し	菊ヶ池	菊ヶ池	菊ヶ池	菊ヶ池	菊ガ池	(15) 東嶽窟
14	拝返	菊ヶ池	菊ヶ池	拝返し	拝み返し	拝み返し	拝返し	拝返し	(14) 蘭池

1) 霊地名の表記については、「嶽」は「岳」に、「佛」は「仏」に統一した。

2) 各類型番号下の()内の記号は、依拠した史料の記号を示す。

3) 史料Cでは、第54は空欄、第53は「弥山宿」になっており、この部分だけ史料Hによった。

宿(森)、第19行仙宿(岳)、第16(17)檜ヶ宿(檜ヶ岳)の場合は、表記の違いが霊地の実際の位置にも影響している点において、別に検討すべき重要な問題を含んでいる⁷⁾。また第72も、類型①～③が子守神社と勝手神社の両方を霊地としている点で、水分神社(子守神社)1社のみを霊地とする類型④・⑤とは表記以上の違いが

ある。

以上述べた霊地名の順序・表記等以外にも、個々の霊地名に対する注記にはかなりバリエーションがある。全史料について75の霊地名すべての注記を引用するのは煩雑であるので、各類型の初期の史料から第27～19の霊地名分を抜粋したのが、史料1である。各類型の特徴を

まとめておくと、類型②はほとんど注記が施されていない（H 以外の史料にはまったく注記がない）。類型③は霊地の伝承が多く、4 史料はほぼ同文である（W は若干書き加えがある）。類型⑤は、類型③の注記にさらに説明が付け加わっている（史料 P では第 23 と 22 の霊地）。類型①（史料 B）も、類型③と共通する注記が多いが、詳しくである。類型④は、注記がないか、注記があっても中に注記のつかない霊地が混じっているのが特徴で（たとえば史料 G の第 26～22）、例外的に注記が万遍なくあるのが史料 E と V である。注記の内容は、類型③などと共通する霊地伝承もあるが、それぞれの霊地の位置やそこでの修行の説明が多く、現在の入峰に即した内容になっている。また、類型④にのみ見られる第 75 から霊地名を列挙する史料には、史料 G のように、現在の入峰の順序に従う旨の説明が冒頭にある。

（2）下位類型の先後関係

次に、上で分類した 5 類型の先後関係を検討してみたい。残念ながら、史料間で引用関係のはっきりしているものは少なく、第 1 表に付記したように、G→K、I→O など 6 史料（8 引用関係）だけである。しかも、異なる類型にまたがって参照されているのは、I（類型③）→S（類型④）のみで、引用関係は検討材料とはならない。また第 4 表は、各類型の史料とそれらの執筆年次との関係を表にしたものである。明治後期から大正中期までの 20 年足らずの間に類型⑤を除く 4 タイプが現われており、類型⑤だけが遅れて昭和 32（1957）年に出現する。したがって、新しいと思われる類型⑤を除いて、やはり各類型の先後関係ははっきりしない。

そこで、一般型 75 霊地名一覧のもとになったと推測される『大峯細見記』型一覧の霊地名と対照してみたい。『大峯細見記』型と一般型の一覧は、75 のうち 60 の霊地名が共通しており⁹⁾、それらの順序・表記等を比較することに

第 4 表 一般型 75 霊地名一覧各類型史料と執筆年次との関係

類型 執筆年次	①	②	③	④	⑤
明治	B				
大正		C	D	EFG	
～昭和 10 年		H	I		
～昭和 20 年				JKLMN	
～昭和 45 年			O	QRS	P
昭和 46 年～		T ¹⁾	W	UVXZ	Y

1) 史料 T の執筆年は、昭和 20 年以前にさかのぼる可能性がある。

よって、一般型 5 類型の中でのある程度の後関係を見いだすことができよう。『大峯細見記』型の関係霊地名などは、第 2 表、第 3 表に付け加えたとおりである。まず第 2 表を見てみると、霊地名の順序については、「東巖窟」を「拝（み）返（し）」と同一視してよいかどうかの問題はある⁹⁾が、類型③が『大峯細見記』型と一致する。列挙方向の点では、類型①～③、⑤が『大峯細見記』型と同じで、類型④だけが逆である。

霊地名表記については、第 3 表では相互間の比較が難しいので、新たに第 5 表を作成した。これは、一般型一覧各類型の霊地名表記が、『大峯細見記』型の霊地名表記とどれだけ近いかによって、それぞれの霊地名に 3 点から 0 点までの得点を与え、それを類型ごとに合計したものである。これによると、霊地名表記が『大峯細見記』型と共通する割合の高いのは、得点合計が 30 点を超える類型①～③であり、特に類型②が最も近いと言える。他方、類型④と⑤は相対的に用字の違う例が多い。もっとも、④は作表に用いた史料が類型中の最古の年次のものではない¹⁰⁾ため、このような結果が出たという疑念も生じようが、類型④で最も古い史料 E は 23 点、第二に古い史料 F で 27 点であり、得点はやはり低い。逆に類型②の史料 T は誤字が目につくが 33 点、類型③の史料 W は 32 点で、と

第5表 一般型75霊地名一覧各類型と『大峯細見記』型75霊地名一覧間の霊地名表記の近似度¹⁾

類型 霊地名 ²⁾	① (B)	② (C)	③ (D)	④ (G)	④ (S)	④ (U)	④ (V)	⑤ (P)
勝手神社	△	△	△	×	×	×	×	×
山上	○	○	○	○	○	○	○	○
児泊	△	○	△	△	◎	△	△	△
弥山	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
禅師宿	◎	◎	△	○	△	△	△	△
五古嶺	◎	◎	◎	○	△	△	△	△
楊枝宿	△	◎	○	△	△	△	△	○
仏生岳	◎	◎	◎	△	△	○	△	○
孔雀ヶ岳	○	○	◎	◎	○	◎	◎	○
深山	○	○	△	△	△	○	△	△
平地宿	◎	◎	○	◎	○	△	◎	△
行仙宿	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎
仙ヶ岳	◎	◎	◎	△	△	△	◎	○
四阿ヶ宿	◎	◎	○	○	○	△	○	○
檜ヶ宿	◎	◎	◎	◎	×	×	×	○
東巖窟	×	×	×	×	×	×	×	×
蘭池	△	△	△	△	△	△	△	△
◎個数 (得点)	8 (24)	9 (27)	6 (18)	4 (12)	2 (6)	2 (6)	4 (12)	2 (6)
○個数 (得点)	4 (8)	5 (10)	5 (10)	5 (10)	5 (10)	4 (8)	3 (6)	7 (14)
△個数 (得点)	4 (4)	2 (2)	5 (5)	6 (5)	7 (7)	8 (8)	7 (7)	6 (6)
得点合計 ³⁾	36	39	33	27	23	22	25	26

1) 各類型(史料)の霊地名表記は、第3表に示したものとす。『大峯細見記』型一覧との近似度により◎(3点)、○(2点)、△(1点)、×(0点)に分け、各類型(史料)ごとに得点を合計した。

2) 『大峯細見記』型一覧の霊地名表記。

3) 満点は3点×17=51点になる。

もに得点は高く、史料の新しい古いを問わず、類型①～③は、類型④と⑤に比べて、霊地名表記が『大峯細見記』型に近いと言えることができる。

以上の霊地名順序・表記等の検討の結果、一般型一覧の5類型の中で、類型①～③が古い形を残しており、類型④と⑤は相対的に新しいものであるということが確認できた。このことは、上述した霊地名注記の類型ごとの特徴とも合致する。すなわち、類型④は記述内容が現在の入峰に即しており、また類型⑤は類型③に説明を付け加えたものである。残りの類型①～③の中での先後関係については、霊地名の順序と表記との検討結果が一致をせず、注記の有無・多少も決め手に欠けるので、今のところ判断を

留保せざるを得ない。

(3) 下位類型存在の背景

それでは、一般型75霊地名一覧になぜこのような多くの下位類型が出現したのであろうか。具体的には、なぜ霊地名の順序が入れ替わってしまうのだろうか。些少な違いであるから書写の際の誤記という可能性がない訳でもないのだが、まず順序の違いに何らかの意味があると考えるところから考察を始めてみたい。

下位類型が積極的な意味を持っていたと仮定する場合、修験道内の宗派の違いを明確化するために、別の類型が考案され利用されたということが考えられる。確かに、旧本山派で現在本山修験宗の総本山である聖護院では、機関誌『修験』掲載の史料G・Jをはじめ、入峰修行者

に配布される『入峰の栞』や『奥駈修行の解説と案内』¹¹⁾とも、管見の範囲ではすべて類型④をとっている。しかも、類型④は①～③に比べて新しいものであることは、上述の通りである。しかし、75 霊地名一覧の説明には、聖護院が意図的に他と異なる一覧を採用しているという意識の記述はまったく見あたらない。一方、旧当山派で現在真言宗醍醐派の総本山である醍醐寺の方では、機関誌『神変』掲載の史料 H・Q・T・W や同誌 614 号¹²⁾などに 75 霊地名一覧が見られるが、それらの類型を確認してみると、H と T は②、W は③、614 号と Q は④で、三つの下位類型にまたがっており、特定の類型への固執は認められない。すなわち、修験者が一覧を利用する段階において、特定の類型を意識的に用いているということはなく¹³⁾、上述の類型間の相違自体も意識されていない（気づかれていない）と考えられる¹⁴⁾。

以上のように、五つの類型は実際にはほとんど意味を持っていない。相互の違いも非常に小さいことから、5 類型の出現は、誤写か書写時の微調整によるものと考えざるを得ないだろう。では、誤写はともかくとして、なにゆえに微調整が行なわれたかが次の検討課題となる。そこで、まずその改変の背景を、霊地の位置との関係および入峰ルートとの関係から考えてみたい¹⁵⁾。

前者の霊地の位置との関係について暗黙の前提としてよいのは、75 の霊地名は、原則的に南（熊野）から北（吉野）へという位置の順序に従って、1～75 の番号を付して並べられるということである。すべての霊地の位置が確定していれば、尾根から遠く離れた霊地でない限り、霊地名の配列に混乱が生じることはありえない。ところが、75 の霊地のうち、現在約 3 分の 1 は厳密な位置が定まっておらず¹⁶⁾、一般型 75 霊地名一覧の出現期である明治中期でも状況はそれほど変わらなかったと思われる。類型化の

指標とした六つの霊地についても、近世から位置が明確であったのは仏生ヶ岳のみで、檜ヶ宿（槍ヶ岳）、菊ヶ池、拝返し の 3 霊地は今でも位置がはっきりせず、孔雀ヶ岳は近世と明治期以降で位置が異なっている。このような霊地の位置の不明確さが、霊地名の順序の入れ替えを起こさせたり、違う順序であっても気づかない遠因になっていることは指摘できよう。

後者の入峰ルートとの関係については、立ち寄り順序に従って 75 の霊地名が配列されることが考えられる（熊野からの入峰を「順峰」と呼んで本来の形とするため、番号は南の熊野側から付く）。ただし、75 の霊地は大部分が尾根筋に位置する（位置していると考えられている）ため、それらを巡る順序は霊地の位置の順序と一致せざるを得ない。その霊地の位置の順序はといえば、上述のように、仏生ヶ岳を除いては位置が確定していなかったり、一貫していないという状況である。また、そのような状況をうみだす要因として、第 17～14 を含む上葛川北辺の区間は、第二次大戦後の入峰復興までほとんど通ってはいなかった（ただし、明治 19 (1886) 年～36 (1903) 年に、聖護院が通過をしていた可能性がある¹⁷⁾）という事情がある。したがって、第二次大戦前第 17～14 の霊地は位置関係が非常に曖昧な状態であり、何らかのきっかけで霊地名の順序の入れ替わりがあってもおかしくはなかったと言える。

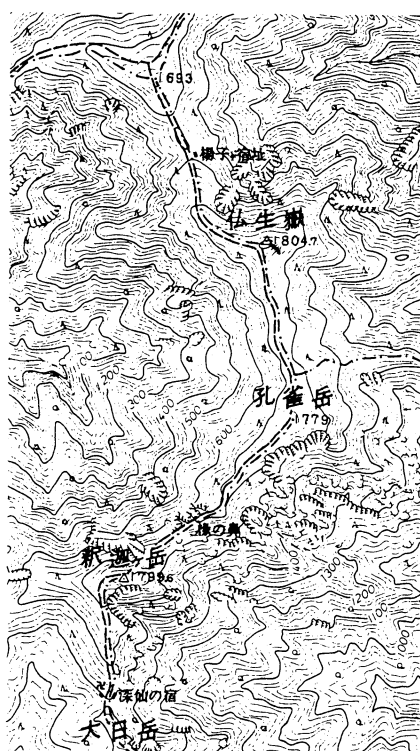
残りの仏生ヶ岳・孔雀ヶ岳は、明治初期の入峰の一時中断を除いて、常に通過をしていたところであり、位置に混乱のあった孔雀ヶ岳もおそらく大正期に入って今日の位置に落ち着く。現在の位置関係と逆になる類型①と②の史料が少ないのも、ひとつにはそういう理由によると思われる。この順序の入れ替わりについては、ある程度その経緯が推測できるので、以下に詳論しておきたい。

(4) 仏生ケ岳と孔雀ケ岳の順序

仏生ケ岳と孔雀ケ岳の順序を考えるうえでポイントになるのは、孔雀ケ岳の位置である。現在の孔雀ケ岳は、国土地理院の地形図(第1図)にも記される標高 1779m の高峰である(仏生ケ岳は 1804.7m)が、景観的にはそれほど目立つ山ではない。屋根筋からの比高は、北方の仏生ケ岳、南方の釈迦ケ岳に比べて小さく、北の尾根からせいぜい 80m である。そのような人目のつきにくさによるのであろうが、ここを孔雀ケ岳と呼ぶようになったのはおそらく明治期以降のことであって、近世の孔雀ケ岳は今よりもっと南寄りの地点を指していたのではなかったかと思われる。

孔雀ケ岳の名前は近世にはあまり見えないのであるが、わずかな関連史料を、楊枝宿と釈迦ケ岳との間で引用すると、史料2の通りである。史料2-1は『大峯細見記』型75 霊地名一覧を載せる史料でもあり、その一覧にある程度対応した記述になっている。この区間は、短い距離の割には細かな地名がたくさん出てくる所であり(それだけ景観の変化に富んだところであり)、それら小地名の位置関係は史料によって違いが見られる。しかし、楊枝宿-仏生ケ岳-孔雀ケ岳-釈迦ケ岳という基本的な地名の位置関係はどれも同じであり、この順序は『大峯細見記』型一覧とも一致する。ただ、孔雀ケ岳が現在の位置ならば、仏生ケ岳のすぐ後に名前が出てこなければならないのであるが、いずれの史料にも山名は見えず、代わりに現在の「鳥の水」(孔雀ケ岳の山頂西下にある)に相当すると思われる「書水」(史料2-2)や「行者隠水」(史料2-3)が記されている。近世の孔雀ケ岳は、史料間の齟齬があるにしても、少なくとも両部分(螺摺と同じか)・椽ノ鼻(第1図参照)よりは南に位置しており、釈迦ケ岳に登る念仏橋・杖捨付近だったと考えられる¹⁸⁾。

ところが、明治期に入り、孔雀ケ岳を仏生ケ

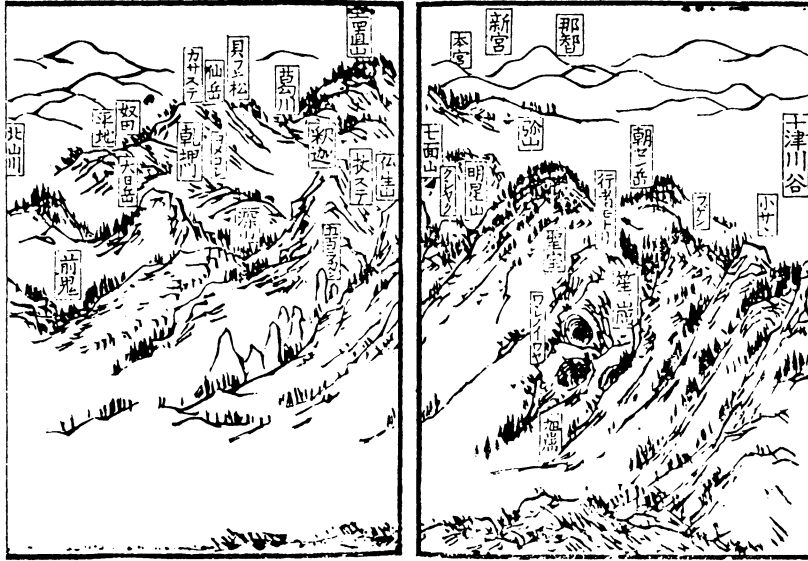


第1図 現在の孔雀ケ岳付近の地形図

出典: 5万分の1地形図「釈迦ケ岳」,
平成元(1989)年修正

岳よりも北の位置に置く史料が現われる。それは、明治13(1880)年大峰を縦走した松浦武四郎の記録で、「庚辰游記」¹⁹⁾の図(第2図)には、北から「弥山」「明星山」「クシャク」「仏生山」「杖ステ」「釈迦」と書かれている。また、彼が金峰山寺蔵王堂に寄進した大鏡²⁰⁾には大峰の景観が地名とともに陽刻されているが、そこでも北から「楊枝」「孔雀岳」「仏生山」「小尻返」「椽鼻」「空鉢」「杖捨」「釈迦岳」と続いている。なにゆえに孔雀ケ岳の位置が移動したのか定かではない²¹⁾が、このような楊枝宿-孔雀ケ岳-仏生ケ岳-釈迦ケ岳という位置関係が、類型①と②の順序に反映したのではないと思われる。

しかしながら、孔雀ケ岳が仏生ケ岳よりも北になっている史料は松浦武四郎のものだけ²²⁾で、明治22(1889)年の『大和国大峯奥通名所案内記』²³⁾や明治24(1891)年の『大峯山行者講



第 2 図 松浦武四郎の描いた孔雀ヶ岳付近の図
出典：松浦武四郎「庚辰遊記」，明治 13（1880）年，
本文注 19）参照のこと。

教化和章²⁴⁾では、現在のような仏生ヶ岳と孔雀ヶ岳の位置関係になっている。大正 2（1913）年に発行された 5 万分の 1 地形図「釈迦ヶ嶽」もまた、現在のピークの位置に孔雀ヶ岳を記入している。この状況を反映しているのが、類型③～⑤の順序である。なお、昭和 5（1930）年版の『山岳旅行案内』²⁵⁾では、「地図上ノ孔雀岳」と「案内人ノ云フ孔雀岳」とを書き分け、後者を釈迦岳頂上から 9 分手前の所としており、近世の孔雀ヶ岳の位置が、この時代まだ案内人に伝承されていたことが分かる。

以上のように、孔雀ヶ岳の位置には三つの考え方が存在したのであり、その混乱に伴って、75 霊地名一覧の仏生ヶ岳と孔雀ヶ岳の順序も入れ替わったのではないかと考えられる。

III. 一般型 75 霊地名一覧の流布

75 霊地名一覧は、上掲史料の半分以上が当時公刊されていることからうかがえるように、出版物という媒体を通じて、修験者以外の人々の目にも触れるようになる。出版物の流通範囲を

第 6 表 一般型 75 霊地名一覧史料執筆者と執筆年次との関係

執筆者 執筆年次	修験者	登山家	研究者	その他
明治	AB			
大正	EFG	CD		
～昭和 10 年	H	I		
～昭和 20 年	J		L	KMN
～昭和 45 年	QS	P	R	O
昭和 46 年～	TW	V	UXZ	Y

知することは困難であるので、ここでは一覧史料の執筆者に着目することにより、75 霊地観の流布を跡づけてみたい。

一覧史料の執筆者には、大きく見て三つの種類がある。修験者がその中に入っているのはもちろんであるが、その他に登山家によるものと、山からは外部者になる研究者によるものがある。

一覧執筆者と執筆年次との関係を、第 6 表によって見てみると、当然のことながら修験者に

よるものが最も早く、また全時期にわたっている。修験者以外で75霊地名一覧にいち早く関心を示したのは登山家であり、大正2(1913)年の河東碧梧桐の記録史料Cを最初とする。研究者の手になる一覧の紹介は、昭和18(1943)年の村上俊雄の著作である史料Lまで待たねばならない。

(1) 登山家の役割

登山家が75霊地名一覧に早くから着目したのは、近代以降登山家たちが大峰に入り始めたことと関連していることは、充分推測されよう。大峰の近代登山史をひもとけば、明治13(1880)年の松浦武四郎²⁶⁾、明治28(1895)年の白井光太郎²⁷⁾といった人物が浮かび上がってくるが、一般の登山家が増加してくるのは、大正期以降のことである。大正2(1913)年の河東碧梧桐(史料Cの執筆者)を皮切りに、大正4(1915)年には大阪朝日新聞(永井栄蔵他)と大阪毎日新聞(北尾鏡之助他)が競って大峰に入り、史料Dの編者である木本光三郎の一行が大峰を縦走したのも、同じ大正4年である。中学・高校・大学の山岳部も、大正7年以降ここを訪れている²⁸⁾。

初期の登山家はまた知識人でもあって、修験道にも強い関心を示している。史料Cの執筆者河東碧梧桐はその好例である²⁹⁾。そして、修験道の霊地にも当然の如く興味を持ち、史料Dの木本光三郎ら一行の登山時には、「殊に旅行中屢話題になったのは、峯中七十五摩の事である³⁰⁾」と記されている。碧梧桐の史料Cは、前鬼の修験者「五鬼継義圓師の示した一書」によったものであり、修験者→登山家という一覧知識の伝播経路を例示している。

75霊地名一覧の流布という点から注意すべきなのは、登山家が入手した知識をすぐに公開したことである。初期の修験者側の75霊地名一覧史料は写本であり、修験者自身の手により一覧が活字化されるのは、大正15(1926)年

第7表 一般型75霊地名一覧各類型史料と執筆者の社会的属性との関係

類型 執筆者	①	②	③	④	⑤
修験者	B	HT	W	EFGJQS	
登山家		C	DI	V	P
研究者				LRUXZ	
その他			O	KMN	Y

の史料G以降のことになる³¹⁾。大峰登山関係の出版物は、75霊地名一覧史料C・D・Iを含め、大正・昭和初期にいくつか出される。それらは、75霊地名一覧あるいは75霊地観の登山界への流布に貢献したと考えられる。もっとも、そこでとりあげられた類型②、③が、後にほとんど受け継がれなかった(第4表)のは、登山書の影響力の限界とも言えよう。

(2) 研究者の役割

一方、修験道研究のスタートに呼応し、昭和18(1943)年以降、ようやく研究者が75霊地名一覧を紹介し始める。研究者の書き留めた一覧史料に特徴的なのは、それらが類型④の一覧に限られていたことである。第7表に一覧各類型史料と執筆者の社会的属性との関係を示したとおり、一覧史料がひとつの類型に固まっているのは、研究者のものだけである。これはおそらく典拠の性格によるものであって、彼らが参考にした史料はいずれも類型④の一覧であった。具体的には、Rの依拠史料G、Uの依拠史料F・Sはともに類型④であり、Lは典拠が記されていないものの、内容から判断して、やはり類型④の史料Jによっている。XとZは、編著者が同じであることから、Uの延長上にあると考えられる。もし、登山家の記した史料C・D・Iのような出版物を研究者が参照していれば、類型④の一覧のみがとりあげられることはなかったかもしれない。逆に言えば、それだけ登山家の出版物は、学界にまでは影響力を持た

なかったということにもなろう³²⁾。研究者が依拠した史料は、登山家のものではなく、修験者の手によるものであり、それがたまたま類型④の一覧であったのである。

このように研究者の著作に類型④の一覧のみが挙げられたことは、周囲に少なからぬ影響を与えてきた（与えるだろう）と思われる。実際のところ、現在の一覧の主流が類型④であることは、第2表で見たとおりである。宮家準を代表とする研究者の著作は、筆者を含む後学の研究者が参看するのはもちろんのこと、修験者や登山家などの目にも触れ、彼らに知識を供することになる。その一例としてもよいのが登山家仲西政一郎の著作であって、彼の手になる昭和32（1957）年の史料Pでは、類型⑤の一覧が記載されているが、昭和49（1974）年の史料Vでは類型④の一覧に変化をしている。直接研究者の著作の影響を受けたかどうかは分からないが、彼の記述内容をみると、各種の文献を参照しており、その可能性は高い。

さらに、再び第2表を見て気がつくように、類型④の中でも、第17を除いて史料E～Rはまったく用字が同じなのに対し、史料S以降は霊地名の表記が若干変わっている。S以降の5史料のうち、U・X・Zの三つは宮家の編著である。これは、一史料をそのまま写すことなく、複数の史料を参酌したことによるのであろうが、類型④の「伝統」とは違う宮家の霊地名表記が、彼の著作のサーキュレーション範囲が大きいことによって、今後広まっていく可能性がある。

IV. おわりに

以上本稿では、前稿³³⁾を補う形で、一般型大峰75霊地名一覧の諸類型と流布について述べてきた。すなわち、75霊地名一覧の下位類型を五つ設定し、類型④が現在の主流であることを、類型①～③が相対的に古いものであることを明

らかにした。また、下位類型存在の背景として、位置の不明確さ、混乱を指摘した。一覧の流布については、修験者以外では登山家がまず一覧（類型②、③）に着目したこと、しかし後から一覧に目を向けた研究者が、修験者側の史料からたまたま類型④をとりあげ、それが影響力を持っている（持つだろう）ことを述べた。

一般型75霊地名一覧の歴史は、明治中期からせいぜい100年しかたっていない。にもかかわらず、上述のように、五つの類型が見出せるほどの微妙な変化をしている。75霊地名一覧は、現在一般的には類型④が広まっているが、しかし古い形を残すのは、研究者の見落としてきた類型①～③であることは、あらためて記しておきたい。

最後に、前稿でも触れた75霊地観の意義という観点から見れば、75霊地名一覧に五つの下位類型があろうと、実際の入峰修行にはそれほど意味がない。というのも、前稿で詳細に述べたように、75霊地名一覧自身が強い規制力を持っていないからである。ただ、表記の違いが霊地の位置に影響を及ぼしている点については、上記のII章(1)節で指摘をしておいたとおりである。

【付記】

本稿の骨子は、1992年11月の人文地理学会大会（於大阪大学）で口頭発表した。

75 霊地名一覧史料出典

- A 「或る山伏の記録」、奥駈4、奥駈葉衣会、1976、20-23頁。「峯の落葉」、奥駈4、1976、38-40頁。明治24（1891）年の入峰記録であり、本文注1）29頁では同年を執筆年としたが、沖見地藏（玉置山）の条に「陸軍測量ノ三角点アリ」との記述が見られる。建設省国土地理院の「点の記」によれば、玉置山の三角点は明治28年8月に埋標されており、執筆年に疑問がない訳ではないので、本稿では

写年の明治 30 (1897) 年の記録としておく。編集者の解説によると弥山から南の記録のようであるが、掲載分は「第十四行所 拝返し」から「第一行所 証誠殿」までである。なお、本誌の閲覧については、宮城泰年氏の御好意をいただいた。

B 喜蔵院蔵。巻頭を欠いており、名称は首藤善樹作成の仮目録によった。執筆年次は、史料中に「明治十七年ヨリ全卅三年までに六十六度の奥駈修行をなしたる」と記されていること、執筆者の北原義定が大正元年に死去していることに基づいて推定した。なお北原義定については、小田匡保「上葛川森下家所蔵の碑伝について—明治期における大峰入峰の一史料として」、本山修験 98, 1988, 30-36 頁の中で少し触れた。

C 河東碧梧桐「吉野群山(下)」, 日本及日本人 613, 1913, 88-89 頁。のちに C': 河東碧梧桐『日本の山水』, 紫鳳閣, 1915, 510-512 頁, および C'': 大和山岳会(岩本武助)編『大和アルプス并に大台ヶ原山』, 大和山岳会, 1921, 60-62 頁に所収。河東碧梧桐の記録の持つ意義については、本文注 2) で述べた。

D 木本光三郎編『吉野群峯』, 積精堂, 1917, 42-45 頁。75 霊地名一覧は、芳山生「吉野群峯踏破記」の章にあるが、「芳山生」が誰のペンネームなのか確認できない。

E 大沢円覚「大峯七十五靡奥駈修行記」, 1917 頃(五来重編『修験道史料集 II (山岳宗教史研究叢書 18)』, 名著出版, 1984) 141-148 頁。書写年は、「大正六年……前鬼山ヲ出門セリ」とある注記によった。釈迦岳の項に、大正 13 年に建立された釈迦如来像の記述がないので、それ以前に書かれたものであることは確かであろう。なお本史料は、二河良英「熊野修験道大峯七十五靡と那智滝修行」, [那智勝浦] 町史研究紀要 4, 1977, 119-125 頁にも紹介されている。

F 宮家準『修験道思想の研究』, 春秋社, 1985, 304-308 頁。宮家は、本史料を「江戸時代末頃、常観房大吽の手になったもの」とするが、本文注 1) で検討したように、史料のうち 75 霊地名一覧の部分に関しては常観房大吽によるものと思われるので、書写者である明禅を執筆者としておく。宮家によれば、本史料は「大正八年に明禅が洞川の龍泉寺で謹写したもの」というが、史料 D の 14 頁には、大正 4 年の木本光三郎をはじめとする「吉野群峯踏破団」の随行者として、「大法螺 洞川 足達明禅」の名前が挙がっており、明禅は洞川在住の修験者だったと考えられる。

G 宮城信雅「大峰山の霊蹟に就て」, 修験 20, 1926, 26-41 頁。

H 牛窪弘善「峰中七十五靡」, 神変 246, 1929, 18-19 頁。H': 牛窪弘善『修験道綱要』, 名著出版, 1980 (執筆は 1933), 236-237 頁に、ほとんどそのまま収録されている。執筆者の牛窪弘善については、H' 巻末の解説(宮家準執筆)に詳しい。

I 中川秀次・富川清太郎『大峰山脈と其溪谷』, 朋文堂, 1934, 324-330 頁。

J 「大峰七十五靡とは」, 修験 107, 1941, 2-16 頁。

K 大伴茂『山伏と尊皇』, 平凡社, 1941, 145-159 頁。

L 村上俊雄『修験道の発達』, 畝傍書房, 1943, 名著出版, 1978 (増訂版), 274-290 頁。

M 大伴茂『山伏と皇民鍊成』, 敵文館, 1943, 61-72 頁。

N 米川千秋編『大峯山』, 吉野熊野国立公園協会奈良県支部, 1944, 111-148 頁。

O 大東延和編『奥吉野へ—吉野熊野国立公園の大観』, 奈良県文化課, 1948, 4-9 頁。

P 仲西政一郎『大峯の山と谷』, 朋文堂, 1957, 54-56 頁。

Q 天野観明「修験道の真髓(45)」, 神変 618,

- 1961, 48-53 頁。Q': 天野観明『修験道の真髓』, 佼正出版社, 1984, 193-202 頁に所収。
- R 村山修一『山伏の歴史』, 塙書房, 1970, 299-300 頁。
- S 福井良盈『大峯山奥駈案内記』, 竹林院, 1970 頁。
- T 森覚応「修験道発展史私考」, 神変 733, 1971, 4 頁。執筆者の遺稿である。文体・内容から判断して, 執筆年は戦前にさかのぼる可能性がある。
- U 宮家準『山伏』, 評論社, 1973, 156-170 頁。
- V 仲西政一郎『玉置山・漣八丁 (山と高原地図 65)』, 昭文社。1984 年版 (9 刷) しか確認していないが, 「あとがき」から判断して, 1974 年に初版が発行されている。昭文社の話では, 地図の内容は初版からそれほど変わっていないだろうということである。なお, この件については, 昭文社編集部基本地図課の関根正氏, 高垣聰氏のお世話になった。Z の文献の 450-451 頁には, これを簡略化したものが掲載されている。
- W 「大峯奥駈修行のしおり」, 神変 790, 1976, 11-16 頁。
- X 宮家準『修験道』, 教育社, 1978, 87-88 頁。
- Y 柞木田龍善『修験の山々』, 法蔵館, 1980, 142-147 頁。
- Z 宮家準編『修験道辞典』, 東京堂出版, 1986, 38-39 頁。

注

- 1) 小田匡保「山岳聖域大峰における 75 霊地観の成立とその意義」, 人文地理 41-6, 1989, 24-40 頁。
- 2) 前掲注 1) 27 頁でも触れたが, これら以外に東南院と桜本坊の 75 霊地名一覧がある。桜本坊の一覧は, ①『大峯々中秘密絵巻』, 桜本坊山伏文化保存会, 1966 の冒頭に載せられているが, これは昭和 41 年の絵巻復刻の際に付けられたもので, もとの絵巻には一覧はない。東南院の一覧は, ②『大峯々中各行所作法』, 東南院蔵版, 刊年欠なる冊子にまとめられている。書かれている内容は近世的であるが, 冊子自体は新しく, 原典が確認できない現段階では, 作成年をそれほど遡らせることはできない。ただし, ③佐藤虎雄「金峰山における祇園信仰」, 神道史研究 10-6, 1962, 511-522 頁にこの書の引用が見られるから, それ以前であることは間違いなかろう。いずれにせよ, 上記 2 種の一覧はほとんど知られていないものなので, 本稿ではとりあげないこととする。なお, 両一覧中の霊地名については, ④宮家準『大峰修験道の研究』, 佼正出版社, 1988, 342-344 頁を参照されたい。
- 3) 小田匡保「山岳聖域研究から見た河東碧梧桐の大峰登山記」, 山岳修験 3, 1987, 55 頁。
- 4) 小田匡保「大峰の霊地伝承史料とその系譜—秘所一覧と四十二宿一覧を中心に」, 山岳修験 4, 1988, 83-95 頁。
- 5) 小田匡保「山岳聖域大峰に関する地理的知識の展開」(歴史地理研究部会発表要旨), 人文地理 42-4, 1990, 84-85 頁。
- 6) 史料 E に 2 と 3 の入れ替わりが見られるが, 類例がないので, 類型設定の指標とはしなかった。
- 7) これについては, 前掲注 3) 55-56 頁で簡単に述べた。
- 8) 詳細は, 前掲注 1) を参照されたい。
- 9) 『大峯細見記』巻之五には, 東巖窟に「遙拝所」との注記がある。なお, 第 14 については, 「菊ヶ池」は「藺池」の誤写が広まったものではないかと考えている。
- 10) 類型④の古い一覧の例として史料 G をとりあげたのは, 実見できる一次史料であり, また類型④では最古の刊本で, 後に史料 R に引用されるなどある程度 of 影響力

があったと考えたことによる。

- 11) 前者は昭和 59 (1984) 年に、後者は昭和 61 (1986) 年に、筆者が聖護院の入峰修行に参加した時、配られたものである。
- 12) 斉藤明道「大峯奥駈修行記」、神変 614, 1960, 26 頁。
- 13) この宗派による説明が当てはまるのは、吉野山の東南院と桜本坊がそれぞれ作成している、一般型とは別の独自の 75 霊地名一覧であろう。いずれも吉野山内の霊地を重視した構成になっている。前掲注 2) を参照されたい。
- 14) なぜ順序の違いが気づかれていないのかと言えば、小さな違いであることに加えて、各類型の史料数を見ても分かるように、④以外の類型があまり知られていないことにもよるだろう。
- 15) 前掲注 1) で述べたように、認識像の成立は、従来の認識像とともに景観・行動とも密接なつながりがある。霊地名の順序の入れ替えも、一認識像の成立と見ることができる。
- 16) 前掲注 1) 35-37 頁。
- 17) ①木本光三郎編『吉野群峯』、積精堂、1917, 69-70 頁。②宮城信雅「大峰山の霊蹟に就て」、修験 20, 1926, 39 頁には、「明治廿四年の本山入峯日誌には靡道を全部通過し、こゝ（筆者注：第 12 古屋宿付近）より十津川村葛川に出でゝ一泊し更に、靡道に登りて進みしと」とある。ただし、明治 37 (1904) 年以降については、同誌の同じ頁に、「本山入峯には、例年浦向を出で笠捨を超え、葛川よりこの峯（筆者注：玉置山）に登りて宿泊する事となつてゐた」とあり、上葛川北辺の尾根を通過していたかどうかははっきりしないものの、③宮城信雅「大峰奥駈修行雑記」、修験 8, 1924, 43-44 頁によれば、「浦向を朝四時に立出、上り阪

二里、峰づたい一里、下り阪二里と云ふダラシない長い長い笠捨山の峠を超へて、十津川の上葛川に出で」（読点を追加）というルートであり、笠捨山を巻いて葛川辻から上葛川に下っていたと考えられる。

- 18) 「岳」という接尾辞が付くが、岩を指していたと考えられる。
- 19) 松浦武四郎「庚辰游記」、1880 (吉田武三編『松浦武四郎紀行集 (中)』、富山房、1975) 59-71 頁。同書の最後に、「今年五月初こ路和州吉野より大峯に登り、弥山、釈迦が岳、前鬼、玉置を過、紀の熊野なる三の山を巡る」とある。
- 20) 金峰山寺蔵王堂蔵。現在吉野山ビジターセンターにて展示中。「明治十三年辰五月大峯々中駈抜（抜力）行者 東京松浦武四郎阿倍□」とある。また、「幹事長 旧竹林院三十七世古沢龍敬」「幹事（3 名略）吉野宮城晋一、同 古沢龍賢、前鬼 五鬼熊義真」の名前があり、修験者との連携のもとに武四郎の大峰奥駈は行なわれたと思われる。
- 21) 楊枝宿と仏生ヶ岳の間に、西麓を巻く小さなピークがあることはある。なお楊枝宿は、2 万 5 千分の 1 地形図（昭和 62 年修正測量「釈迦ヶ岳」）にある「楊子ヶ宿址」の位置（避難小屋のある所）ではなく、ひとつ北の鞍部（「峯中亡霊一切廻向塔」のある所）と筆者は考えている。
- 22) 75 霊地名一覧史料 C の河東碧梧桐の記録にも、孔雀ヶ岳が仏生ヶ岳の北になっている地図が挿入されているが、一覧の順序に従って書かれた可能性も高いので、孔雀ヶ岳の位置を示す史料としてはとりあげない。
- 23) 五鬼童義寛（前鬼不動坊）『大和国大峯奥通名所案内記』、1889、東南院蔵。
- 24) 五鬼継義圓（前鬼森本坊）『大峯山行者講教

化和章』, 松本善助蔵版, 1891, 喜蔵院・天理図書館旧保井文庫蔵。

- 25) 『山岳旅行案内昭和 5 年版』(『野球界』20-11 臨時増刊), 野球界社, 1930, 446 頁。
- 26) 前掲注 19)。
- 27) 白井光太郎「大和吉野より大台原山・釈迦岳・弥山・山上岳を経て再び吉野に出づる記」, 山岳(日本山岳会) 2-2, 1907, 1-17 頁。
- 28) ①「大峯山脈及び大台ヶ原とその登山者」, 山岳(大和山岳会) 1, 1922, 166-168 頁。また, ②笹谷良造「大日ヶ岳以南」, 山岳(大和山岳会) 8, 1934, 3 頁に, 次のようにある。
大正三四年頃急に吉野群山への登山熱が勃興した事があつて, 大阪朝日・大阪毎日の両新聞社が先陣を争うて大峰に入つたのも, 大和の実業家木本氏の一行が出かけたのも, 偶然にも大正五年(筆者注: 四年の誤り)の夏であつた。今を時めく『天声人語』子が毎日新聞の計画を聞いて一步先に大峰入りをやつたのは, 両社の競争を語る一つの話柄となつてゐる。
このエッセイは, ③岸田日出男・笹谷良造『吉野群山—紀行と隨筆』, 郷土研究社, 1936, 55 頁にも収録されている。なお, 雑誌『山岳』の閲覧については, 岸田文男氏の御好意をいただいた。
- 29) 前掲注 3) 参照されたい。
- 30) 前掲注 17) ①41 頁。
- 31) 史料 G は, はじめて 75 霊地名を逆方向に(第 75 から)列挙した一覧であり, 各霊地名の注記にもオリジナルな記述が多く, 画期的なものだったと言える。
- 32) 登山家と修験者との関係は, 登山家と研究者との間ほど疎遠ではない。一覧史料 G では, 史料 C の河東碧梧桐の文章が参照されている。
- 33) 前掲注 1)。

〔史料 1〕 一般型 75 霊地名一覧各類型の霊地名
注記 (第 27~19)

類型① (史料 B)

- 19 高祖山籠, 霊地なり, 金剛童子, から池ニ^(カ)百足内ヨリ
- 20 高祖山籠秘法修行ノ処なり, 金剛童子, 転法輪嶽
- 21 役行者并聖法師^(ママ)の加持処なり, 金剛童子, 一里程下り古屋塔あり, 大池あり, 西の谷に水あり
- 22 如意宝珠經ヲ埋メ給ふ霊場なり, 金剛童子
- 23 大峯阿字間^(ママ), 一ノ鳥井, 最霊場なり, 東の谷に水あり
- 24 俗に石の塔と云ふ所なり, 最霊場なり
- 25 俗ニ石塔西ノ門ト云フ, 石の門ある故に西の門と云ふ
- 26 即俗ニ石塔東ノ門と云ふ処なり
- 27 子守三十八社, 不動明王等霊場ナリ, 俗ニヨメコシと云ふ処あり

類型② (史料 H)

- 19 役公山籠の霊地
- 20~27 (注記なし)

類型③ (史料 D)

- 19 高祖深秘の所なり。
- 20 前同断。
- 21 役行者, 弘法大師の加持水あり。
- 22 如意宝珠經を埋め給ふ霊場なり。
- 23 峯中満山の鳥居阿字門とも云ふ。
- 24 石の塔石の門あり西の門とも云ふ。
- 25 同西の門とも石の門とも云ふ。
- 26 石の塔あり東の門とも云ふ。
- 27 子守三大社, 不動明王あり。

類型④ (史料 E)

- 19 遙拝, 之ヨリ全ク嶮岨ノ道デ仙人ヨリ行ケヌ行場ナリ
- 20 今ハ宿坊ナシ
- 21 大杉林アリ, 今ハ宿坊ナシ

- 22 今宿坊ナシ
- 23 剣光門トモ言、地藏岳、コノ谷ニ役行者ノ銅像ト義覚・義賢ノ銅像三体埋メアリト伝言アリ
- 24 嫁越峠ノ名アリ
- 25 天狗岳ノ名アリ
- 26 (注記なし)
- 27 十九ヨリ二七マデ全ク道モナク浦向ヨリ池原通り前鬼山へ

類型④ (史料 G)

今これを熊野より順にあげるのが至当であらうけれ共、今日大峰奥駈修行をなす人は殆ど吉野より熊野に出づる逆峰をとつてゐるから、(中略)逆にこれをあげ本山入峰の際の順序に従ひてのべ、附近の名所をもかゝげる事とする。

- 27 俗に嫁越と云ふ。前鬼より右方に登りたる処なり。
- 26~22 (注記なし)
- 21 大杉あり、明治廿年頃には小屋ありしと。
- 20 小屋あり。以前には前鬼山を出でゝこゝに泊る。
- 19 怒田より二里、水ありと。

類型⑤ (史料 P)

- 19 高祖深秘の所。
- 20 同。
- 21 役行者、弘法大師の加持水あり。
- 22 如意宝珠經あるいは孔雀明王經を埋め給う靈地。
- 23 峯中満山の鳥居阿字門ともいう。剣光童子。
- 24 石の塔、石の門あり。西の門ともいう。
- 25 同西の門とも石の門ともいう。
- 26 石の塔あり東の門ともいう。
- 27 子守三大社、不動明王。

〔史料 2〕孔雀ヶ岳に関する近世史料

(楊枝宿~釈迦ヶ岳間)

〔史料 2-1〕「大峯細見記卷之四 (当山奥通之事)」享和 3 (1803) 年頃

其レヨリ行テ、楊枝ノ宿 (中略)、
夫レヨリ行テ、仏生嶽、頂上ニ岩坐アリ、
其レヨリ段々行処、遙ノ谷ノ下ニ、十六丈ノ青不動、矜迦羅、制吒迦、一目ニ見ユル他、
其レヨリ兩部分ケ〈一名ヲ螺スリトモ云〉、則チ北ハ胎蔵界、南ハ金剛界也、夫ヨリ役ノ波那〈昔シハ金仏ノ役行者アリ、サレトモ御厨子等無ク、故今神山ニアリ〉、
夫ヨリ空鉢嶺 (中略)、
其レヨリ左ノ方、金剛童子アリ、
夫ヨリヒゲスリ、
其レヨリコジリ返シ、
其レヨリ行テ、羅漢ヶ嶽 (中略)、十六羅漢、五百羅漢、石像アリ、
又孔雀明王ヶ嶽〈七十五ノ内其一也〉、孔雀明王ノ岩坐アリ、
夫ヨリ行ニ、杖捨ト云古所アリ〈此処ニテ杖捨置ナリ、即父母成仏ノ為メナリ〉、
夫ヨリ頂上ニ登ル、釈迦ヶ嶽ナリ (以下略)

〔史料 2-2〕油屋金兵衛「大峯山上并所々参詣道之記」天保 10 (1839) 年

楊枝ヶ森 同宿あり

此山□大山にして、釈迦嶽の前に有て、釈迦より此山にさゑられ、山上は見へず、山上よりも此山に隔られて、釈迦嶽不見也、此森七八丁の登り坂有

仏生ヶ嶽

書写水

鑑返し

石のきだはし右の方也、通るに刀のこじりにあたれハ、こじりを返し通るとて、こじり返しと言、石道にて登り下りの坂なり

髭摺

螺摺

椽のはな

岩のさし出たる事、ゑんのはなのごとし、
北の方正面に見る、岩根は西に出、此ゑん
のはなの下は屏風立石と言岩にて、屏風を
立たるかごとし、此所釈迦嶽の方也

空鉢ヶ嶽

羅漢石

五百羅漢共言

道は中を通り、左右一面にらかんの像した
る石あり

孔雀明王ヶ嶽

杖捨

又杖なげ共言、諸人杖を此所にて捨るゆ
へ、山のごとく積重ねたり、此所より釈迦
堂へ三丁斗登り坂道、石わらにて悪し

釈迦ヶ嶽

（以下略）

〔史料 2-3〕「金峰山修行」天保 10 (1839) 年

楊枝宿金剛

仏生嶽金剛

鎧返金剛

髭摺

貝摺

両部分

椽ノ鼻

七面石

五百羅漢石

青不動石

孔雀ヶ嶽

空鉢金剛

杖捨

念仏橋

白砂坂

釈迦ヶ嶽（釈迦 文珠 普賢）

（以下略）

〔史料 2-4〕「奥駈記」弘化 2 (1845) 年

一、楊枝金剛童子 法楽

此所、御入峯ニハ本山方々壺間四方仮

休足所、又二間ニ丈^(マ)間壺ヶ所柴ごや、

当山方々相建候事

爰ニテ中飯ス

一、仏生嶽金剛童子 法楽

此所、登り難所也

一、行者隠水金剛童子 法楽

次、両部分、此所当山本山ノ支配分也

こしり返し

椽の鼻

十六丈青不動

是ハハツ石尊像アリアリト相分候

クリカラ不動立スガタ

表十六羅漢

次、釈迦説法石

ハルカニ見ユル

七面山ナヲモテ

袁（遠カ）五百羅漢

鉄鉢石

一、空鉢金剛童子 法楽

念仏橋

杖捨 先達ハ不及申、同行白砂杖ヲ捨
候也

クジャクガタケ

此辺深々奇妙之霊場絶取□

一、釈迦ヶ嶽 法楽

（以下略）

史料 2 注

〔史料 2-1〕天理図書館旧保井文庫蔵。

〔史料 2-2〕天理図書館旧保井文庫蔵。

〔史料 2-3〕聖護院蔵。

〔史料 2-4〕靈山寺観音院文書（元興寺文化財
研究所撮影の写真による）。本史
料の閲覧に際しては、吉井敏幸氏
にお世話いただいた。

なお、史料 2-3 を除き、引用に際して読点を
補った。史料 2-1 は、筆者の判断で適宜改行
もしてある。〈 〉内は割注である。

Types and Propagation of Lists of 75 Sacred Place Names in the Ohmine Mountains: Roles of Mountaineers and Researchers

Masayasu Oda*

Some of Japanese mountains which have been the setting of mountain religions have a special number of sacred places. In the Ohmine Mountains situated from Nara to Wakayama prefecture, central Japan, 75 sacred places have been believed to exist since the 19th century. It is the lists of 75 sacred place names that represent concrete evidence of the 75-sacred-place view. The lists are of two types, namely, the "*Ohmine-saiken-ki* (*Geography of the Ohmine*)" type and the general one. Further, there are some differences among the list records of the general type. By scrutinizing these differences this article firstly attempts to set up subtypes of the general type of lists and examine the order of appearance. Secondly, attention is paid to the writers of the list records of the general type. Interestingly, it is outsiders of the religion, such as mountaineers and researchers, as well as insiders who have put the lists on record. Through giving attention to their roles it becomes clear how the lists originating within the religion have been propagated to the outer world.

The findings obtained are summarized as follows:

1) A fundamental difference among the list records of the general type is the order of the place names. To be concrete, two adjacent place names are replaced by each other in three parts, namely, No. 14 and 15, No. 16 and 17, and No. 42 and 43. By this difference the general type lists of 75 sacred place names are classified into five subtypes. They differ from one another in other points, too, such as arrangement direction (from No. 1 or from No. 75), characters and notes of the place names. Many of the list records come under type ④.

2) The order of appearance of five subtypes is

not made known directly from the list records, because few of them cite any sources and the four types except type ⑤ appeared in almost the same period, ca. 1900 to 1920. By comparing with the "*Ohmine-saiken-ki*" type, from which the general type is supposed to be derived, we find that types ①, ② and ③ are older than ④ and ⑤.

3) Religious societies do not always use the special type of list consciously, which means the different types were not made for the originality of respective societies. The change of the lists seems to have arisen from the fact that the locations of some sacred places including No. 14 and 15 were, and are, not evidently identified.

4) It is mountaineers who were first interested in the lists of 75 sacred place names, except for mountain ascetics who must have made and recorded them. They began to enter the Ohmine Mountains from the end of the 19th century, and a mountain climber who went there in 1913 wrote down the third oldest list record. They published the lists, and this is supposed to have contributed to their propagation in mountaineering circles. However, it shows the limitation of their influence that types ② and ③ they took up have hardly been inherited afterward.

5) Researchers started to introduce the lists from as late as 1943. It is a characteristic of their records that they happened to be only type ④. Researchers are supposed to have referred solely to some writings of mountain ascetics, not to mountaineering books. The type ④ taken up by academic authorities is thought to have been influential in mountaineering circles and religious societies as well. However, it must be pointed out that the older type of lists of 75 sacred place names are types ①, ② and ③ which the researchers have long overlooked.

* Department of Geography at Komazawa University, Tokyo.